

江戸の「ご隠居」につながる生き方

中江克己
Nakae Katsumi

人生100年時代に向けて、定年後も引き続き財テクや再就職を考える日々。もはや当たり前のようになってきている老後のための備えの形だが、果たしてそれだけで本当に幸せを感じることはできるのであろうか？
寿命が短かったとされる江戸時代だが、「ご隠居」として
第二、第三の充実した人生を送り長生きしたご長寿も少なくなかったという。
そんな江戸時代の「ご隠居」のあり方にスポットをあて、そこから今活用すべきさまざまな術や思考を導き出す。

「人生100年時代」の「いい老人」

二十数年前には「日本の平均寿命が世界一になった」などと喜んだものだ。たしかに寿命が延びて、なにか得をした気分になった人は少なくなかった。

ところが、その後、急速に高齢化が進み、今や「人生100年時代」といわれるまでになった。65歳以上の高齢者は平成6（1994）年現在、人口の14%だったのに、平成30（2018）年には28・1%、3557万人に達した。
こうなると喜んでばかりもいられない。あれよあれよというまに超高齢化社会に突入して、さまざまな課題が生じてきたからである。

60代、70代の人びとと話をしてみたが、定年が延びたとはいえ、定年後に生き抜く健康、生活資
年寄ってから苦勞するな。身持ちがさかさまだ」
ここに出てくる「老人」は「年老いたこと」で、
今でいう「老後」、あるいは「老境」のこと。「いい老人」は「いい老後」であり、これが江戸庶民の理想の老後だった。

医師の香月牛山は、老いに段階があるとして、若い頃から初老40歳、中年50歳、下寿60歳、中寿80歳、上寿100歳と区分した。年齢には諸説が



『田家茶話六老之図』
横井也右による狂歌集『行々子』の「老のすさび自箴の詞」に詠まれている歌をもとに歌川国芳が作画。6人の老人が茶飲み話をしている様子が描かれている。「皺がよる ほろろはできる 背はちぢむ あたまははげる 毛は白くなる」などまさに現代にも通じる老人の悩みが綴られているが、自戒を促している。
所蔵/国立国会図書館



『譚話（おどけばなし）浮世風呂』式亭三馬
所蔵/国文学研究資料館

なかえ・かつみ
1935年、北海道生まれ。思潮社、河出書房新社などの編集者、染織文化誌『藍』編集長を経て、作家・評論家として幅広く活躍。現在も江戸の庶民文化や染織文化を中心に精力的に執筆を続ける。著書に『江戸の定年後——ご隠居に学ぶ現代人の知恵』（光文社）、『大江戸（奇人変人）かわら版（新潮社）』、『色の名前で読み解く日本史』、『江戸の「水路」でたどる！水の都東京の歴史散歩』（共に青春出版社）などがある。

れで悪くはない20年だった、と満足しているし、すべてに感謝している。思うに、いつでも臨機応変に対応できる覚悟をして生きていけばよいのだが、へまをすることも多かった。

ところで、江戸時代の老人たちは「豊かな老後」というか、自分たちが「満足すべき老後」を、どのように考えていたのだろうか。

式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』を読むと、昼下がりの銭湯で近所の金兵衛と源四郎とが、亡くなったばかりの傘屋の六兵衛のことを話し合っている場面が出てくる。金兵衛はしみじみと、こういう。

「六兵衛さんも、いい老人だ。息子たちは粒ぞろいだし、みな壮健だよ。娘はそれぞれ嫁にいつてもう孫が5、6人もいる。いま往生しても、思い残すことがないのさ。あの人は若いうちに苦勞したから、年寄って楽するけど、いまの若い連中は

ていた。

五人組は、江戸幕府が村々の百姓、町々の地主や家主に命じ、5戸1組を基本としてつくらせた隣保組織だ。火災や盗賊、浪人などの取締りに用いたほか、婚姻、相続、貸借などの立会い、納税や犯罪の連帯責任を負わせた。

こうしたことを通じて世代間交流が行われていたことになる。俳句や短歌などの文芸グループも数多くあって、縁づくりが活発だった。

いずれにしても、楽しみを見つけ出したり、人脈を広げて人生を充実させる人も少なくなかった。また、年とともに肉体的に老いていくのはやむをえない。しかし、多くの経験によって知識が豊富になり、知恵が深まっていく。

肉体的には老いて頭がまわらなくなることがあるにちがいない。だが、その一方、人間的に成熟し、何かが「生い」る。江戸の老人たちは、「老いばれ」などといわれても、卑下したものではない、と誇りをもって生きていた。

江戸の老人を侮るな

もっとも江戸時代は「人生50年」といわれ、今とくらべると平均寿命は短い。その理由として、出産時に母親と子どもが死去することが多かったことが指摘されている。

当時、幼い子の命を奪ったのは疱瘡（天然痘）だった。この病はすでに昭和55（1980）年、WHO（世界保健機関）が絶滅宣言をしているから、今は心配ない。ところが、江戸時代にはたびたび流行しており、疱瘡が幼児死亡原因のトップだった、と推定されている。

そうはいっても、長生きする老人は少な

かった。当時、親孝行が推奨され、子どもたちに老いた父や母を扶養する責任を負わせたが、だれもが責任を果たしたわけではない。生活が困窮するあまり、老いた父や母の扶養を放棄せざるを得ない、という事態に追い込まれることにもなったのだ。

今はエネルギー効率やスピードに価値を置く傾向が強いが、江戸時代は逆に自然のリズムのなかでものをつくり、ゆったりと暮らしていた。また、今のように情報が短期間のうちに消費され、陳腐化するという時代ではない。

当時は、人が生きていく間に身につけた知恵や技術が長く役に立っていた。だから若い人にも老人から学ぼうとする姿勢があったし、老人もまた、老いても楽しく生きていくことができたのである。むろん、なかには老人を侮る若い人たちもいた。すべての若い人が老人を尊敬していたわけではない。

細川忠興に江戸源太兵衛という家臣がいた。源太兵衛は隠居後、83歳のある日、庭に柿の種を植えようとすると、それを見た家来たちは、くすくす笑い出し、ひとりが侮るようになっていった。

「80歳を超えた御身なのに、おいくつになつたら実を食べられると思つていらつしやるのですか」家来のうち、上田藤八郎だけは笑わず、主の源太兵衛にいわれたまま、柿の種を植えるのを手伝った。

柿の種が芽を出し、成長して、たわわに実をつけたのは11年後のことである。源太兵衛は94歳になったが、矍鑠としていた。源太兵衛は柿の実を藤八郎に与え、さらに俸給を2倍にした。そうすることで、無言のうちに若さの驕りを戒めたのだ。が、自慢したわけではない。

年まで築地中央卸売市場として使われていた場所で、敷地は1万7000坪。ほとんどが庭園で占められ、竹林や築山、原、池などがつくられていた。定信は毎日、この広い庭を歩きつづけた。そして、食生活に留意し、体を動かす。さらに武術の稽古に励んだが、頭もよく使った。机に向かつて書きものをしたのだ。こうして170編以上の著作を残しているのだから、すごいものだ。

老後の幸せを考えると、健康で過ごすことが重要だ。江戸時代には「健康」という言葉がなく、もっぱら「養生」といった。むろん、病になったときは薬を飲んだり、医者に診てもらおう。しかし、できるだけ健康でいられるように養生書（健康法を記した本）を読み、食生活に注意した。

食事に気を配り、広い庭を歩き、そのうえ頭を使うという定信の老後の生き方は、現代人にとっ



「賢女烈婦伝」
「加賀の千代」
加賀千代の代表句「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」は歌川国芳の浮世絵にもなっている。
所蔵／東京都立中央図書館特別文庫室

老中松平定信の隠居暮らし

江戸時代には、老人を大事にする習慣として、各地に大名が主催する尚歯会があった。「尚」は尊ぶ・大切にするという意味で、「歯」は年齢のことだ。

陸奥白河（福島県白河市）藩主で、老中首座をつとめた松平定信は、老人を大切にすることでよく知られている。武士は70歳以上、百姓や町人は90歳以上の老人を城に招き、人生の努力をねぎらい、料理や酒でもてなした。定信は「老いたる者は多くの経験をしている」といって、老人たちに



尚歯会図
唐の白楽天が行ったのが最初とされ、日本でも老人を尊敬し、高齢を祝うために宴を催すようになったが、江戸後期には政治や社会問題を研究する会などにも発展する。
作品は、熊本藩の馬医で優れた絵師としても活躍した福田太華（ふくだたいか）によるもの。
所蔵／熊本県立美術館



松平樂翁像
晩年樂翁と号した定信自筆の頭部のみの自画像をもとに、松平定永が狩野養信に命じて全身の肖像画を描かせたとされる。
所蔵／福島県立博物館

でも参考になるのではないだろうか。また、そのような定信だからこそ、老人を大事にすることができたにちがいない。

隠居して何を楽しむ?!

今なら60歳、65歳、あるいは70歳などの区切りで定年退職という制度がある。定年を迎える年齢は少しずつ延びてきたが、元気な人はその時期が近づくと、次の仕事を探しはじめる。むろん、就職せず、趣味に打ち込むという人も多い。

こうして第二の人生、第三の人生と、それまでに経験したことのない仕事や趣味に取り組みながら新しい人生を生きる、という人が増えてきた。それだけ人生の選択肢が多くなっているのだ。

ところが江戸時代には、そうした選択肢がいろいろあったわけではない。だから第二の人生とか、第三の人生などと人生を仕切り、新しい何かに挑む、という人は、きわめて少なかった。

それでも江戸の老人たちは多くの経験をもとに、豊かな知恵を発揮しながら、隠居暮らしを楽しんでいた。落語などでおなじみの「隠居」だが、自由気ままに暮らしている印象が強い。ときには、八つあんや熊さんがやってくると、あやふやな知識をひけらかす。しかし、だいたいがお人好しと相場が決まっている。

仕事から引退したといっても、なにもせずにごろごろしているのではなかった。植木や骨董に熱中したり、ときには芝居見物などを楽しむ。商家で働いていた人は、読み書きや算盤が得意だから、隠居後は寺子屋の師匠になった人も多い。

江戸では教育熱心な人が多く、寺子屋もあつちこつちにあつた。師匠の数は江戸時代前期で約

藩政（行政）への意見を話してもらい、熱心に耳を傾けたという。

ほかに、70歳以上の老人を温泉に招き、体を休めるようにした。さらに90歳以上の老人がいる家には、扶持米一口（1日5合）を終身にわたって支給しつづけた。

定信が隠居したのは文化9（1812）年、55歳のときだが、領内の老人を大切にただけに自分の隠居暮らしにも気を使った。日々、早寝早起きを心がけ、規則正しく暮らしている。健康のためにはいいことなんでも試みた。

定信が隠居して住んでいた松平家下屋敷は、近

800人、後期になると3000人を超えるほど。その4割が商家あがりの隠居だったとされる。

では、江戸の人びとは何歳ぐらいで隠居したのだろうか。とくに定年制のように、隠居年齢が決まっていたわけではない。基本的には本人の意志と、その家の事情が決まる。

一例をあげると、江戸後期の俳人・小林一茶のパトロンとなった夏目成美だ。成美は本名を井筒屋八郎右衛門といい、浅草蔵前で札差（金融業者の一種）を営んでいた。俳句にも力を入れ、俳人としても著名だった。

42歳で隠居し、俳句三昧の日々を過ごした後、68歳で没した。隠居暮らしは26年におよんだが、句作に耽るだけでなく、一茶をはじめ多くの若い俳人を援助し、人のためにも尽くした。

一般的にいつて隠居したのは60歳過ぎだが、成美のように40代で隠居する人も多かった。その理由は、あまり年老いてから隠居したのでは、人のために尽力するとか、趣味をきわめるとか、風流な暮らしを楽しむ、といったも体力が衰えているし、時間が足りない。そこで余裕のある人は、早いうちから隠居後の備えをした。

晩年に輝いた老女たち

ここまで書いてきて、ふと、江戸時代の女性たちは隠居後の人生を、どのようにして充実させていたのだろうか、という思いに駆られた。女性の隠居はあまり聞かないが、無視するわけにはいかないだろう。

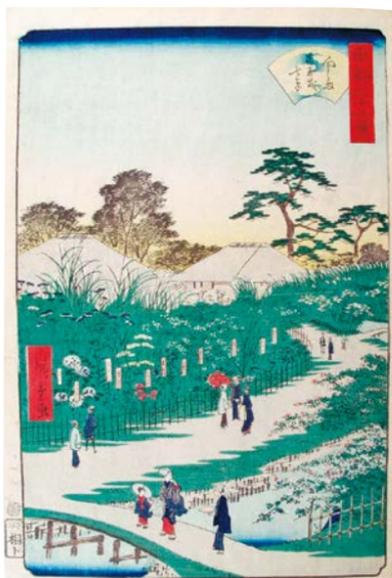
「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」

この加賀千代の句は、多くの人に親しまれている。千代は元禄16（1703）年、加賀の松任（石



向島百花园

江戸期より伝わる伝統行事「虫まきの会」「お月見の会」や「萩まつり」なども開催され当時の風情も感じられる。園内にある茶店は今も佐原鞠塙の子孫が営んでいる。
東京都墨田区東向島3丁目
写真提供／向島百花园サービスセンター



東都三十六景 向しま花屋敷七草

歌川広重二代作
提供／墨田区教育委員会

川県白山市)で生まれた。父親は、表具師の福増屋六左衛門だったから、千代は和歌や俳句などの表装を手がけていた父の仕事場で遊び、いつしか俳句が好きになった。

12歳で奉公に出た家の主人から俳句の手ほどきを受けたり、行脚していた松尾芭蕉門下の各務支考に教えを受けたこともある。ところが、35歳を過ぎた頃から不幸が続く。父や母、兄が病没し、やむなく家業の福増屋を継いだ。

院の茶所だった庵である。慶應2(1866)年から85歳で生涯を終えるまで、ここで過ごした。晩年は和歌に加えて、陶器を楽しむ日々だった。多くのファンとも親しく交流していたのである。運月を敬慕していた黒田光良を弟子とし、のちに二代目運月を許した。
加賀千代、大田垣運月ともに若い頃は苦勞続きだったが、努力が報われたし、老後の人生は見事なものだった。

第二の人生の課題 ——「どのように生きたいのか」

定年後は充実した第二の人生を過ごしたい、と思うが、これがなかなか難しい。もっとも重要なのは「何をするのか」という課題を持つことだろう。しかし、実際には課題を決めかねている人が多い。

定年後の趣味も同じである。若い頃、ある小説家とこのことについて話をしていて、定年になった人が「短歌をやっているけれどうまくいかない」とぼやいていることを伝えた。すると、「定年後暇になったからといって短歌をはじめても、すぐ



佐原鞠塙肖像、「園のいしぶみ」より
提供／茶亭さほら

仕事の苦勞は続いたが、表具師をやめるわけにもいかず、六兵衛を養子に迎え、仕事を教えた。やがて一人前になった六兵衛に福増屋をゆずり、千代は隠居する。しかし、当時、女だという理由で句会に出ても差別を受けた。

千代は52歳のとき、差別をはねのけるために剃髪して素園と号した。尼であれば女を捨てたことになるし、句会で男たちと同席しても同じように扱われた。年若い俳人に対しても尊大ぶらずに精

うまくなるわけもないし、おもしろくなるはずもない。若いうちから短歌をはじめれば、やがていい作品ができて人にもほめられ、自分でも興味が深まる。やはり時間をかけなくてはだめだよ」と答えて返ってきて「なるほど」と思ったものだ。

現在でも「向島百花园」(東京都墨田区)には季節ごとにさまざまな花が咲き、訪れる人が多い。これは骨董屋で成功した佐原鞠塙がつくった。とはいえ、鞠塙ひとりで行ったわけではない。多くの人がびとを巻き込み、それなりの年月をかけてつくりあげたのだが、鞠塙は隠居後の趣味に友人や知人に参加してもらい、利益を生みながら長続きする方法を考え出したのだ。今でも定年後にこのようなネットワークをつくり出し、社会的な活動を展開する方法が応用されている。

鞠塙は仙台の農家出身だが、江戸へ出て10年間、芝居茶屋で働く。この間に金を貯め、骨董屋を開いたのだ。なにをするにしても若い頃から準備が欠かせないのは、いつの時代でも変わりがない。芝居茶屋では気配りを学び、裕福な客たちに触れるうちに、書画骨董に親しむようになった。こうして多様な人びととの交流が広がり、深まっていく。やがて40歳の頃隠居し、鞠屋宇兵衛と改名。これを縮めて「鞠塙」と称した。

まだ体力には余裕があったので、やりたいことを次々に手がけた。最初に企てたのが詩集の刊行で、著名人に詩を寄せてもらい、自分でも2編の詩を書き、『盛音集』を出版した。これが43歳のことである。

次に、寺島村(墨田区東向島)の土地を1000坪買い取り、園芸をはじめた。鞠塙は自ら鋤を握って土地を耕し、そこに梅の苗木を植えようと思ったが、これまで交流のあった人びとに奉加

進するので、好意的に迎えられる。こうして各地の俳人たちの交流が広がり、新たな生きがいとなった。

晩年は喘息に苦しんだが、病に負けず、句を詠みつづけた。安永4(1775)年、73歳になっていたが、初孫を迎えることができた。満ち足りた日々だったのでないだろうか。

しかし、その年の9月8日、千代は家族や愛弟子に囲まれ、次の句を残して息を引き取った。「月も見えて我はこの世をかくしく哉」

そしてもうひとり、幕末に活躍した女流歌人大田垣運月を紹介する。

運月は、寛政3(1791)年、京都で生まれた。父母については諸説があり、はっきりしない。生まれて間もなく、知恩院の寺侍大田垣伴左衛門光吉の養女となり、8歳の頃、丹波亀山城(京都府亀岡市)に奉公に出た。

17歳のとき、光吉の養子となった望古と夫婦になり、一男一女をもうけたが、いずれも早世。その後、夫の望古が放蕩を重ねたため25歳で離婚する。27歳で再婚したものの、夫は4年後に病死した。運月は家庭的に恵まれていないこともあって、剃髪し、運月と号した。

運月が42歳のとき、養父が病死したのを機に栗田に移り住む。ここで陶工の手ほどきを受け、陶器をつくりはじめた。運月は陶器を売り、生活しようと覚悟したのである。しかし、すぐには売れない。陶器に自作の歌を釘で彫りつけたところ、評判を呼び、いつしか運月焼といわれるほどになった。運月は三十数回も引越しをしているが、ファンが作業場に押しかけ、仕事ができなくなったからだ。最後の住処としたのは、西賀茂の神光

帳(寄進帳)をまわしたのである。それは画家の酒井抱一や谷文晁、茶人の川上平白、戯作者の大田南畝、歌人で国学者の加藤千蔭、村田春海らだが、だれもが快く梅の苗木を1株、2株と寄進してくれた。

こうして文化元(1804)年、360株の苗木を植え、梅園として出発した。寄進した人びとも愛着を抱いたのか、自ら鋤を使い、勝手に自分の苗木を植える人もいたという。

当時、亀戸の梅屋敷が人気だったので、鞠塙の梅園は新梅屋敷と呼ばれた。その後、桔梗や女郎花、萩、薄など草花を増やしていく。

さまざまな花が咲くので、多くの人がびとが訪れるようになった。なかでも好まれたのは桜や梅だったが、鞠塙が力を入れたのは、花の後に実をつける梅である。梅見の客から茶代をとったし、梅の実から梅干しをつくり、おみやげとして販売した。鞠塙の老後は、趣味を生かしながら多くの文人墨客と交流し、楽しみを深めていく、というものだった。しかも利益を生むので、長続きする。

「隅田川梅のもとにて我死なば、春咲く花の肥料ともなれ」
これは鞠塙の辞世だが、なんとも羨ましい心境である。天保2(1831)年、70歳で没したが、その生涯は満ち足りたものであったことがうかがえる。なお現在、向島百花园は、国の名勝・史跡に指定されている。

こうしたやり方が可能なら、老後資金はむしろ増やすことができるし、交友関係も広がり、楽しみも増える。むしろ、定年が近くなつてから考えはじめても遅い。準備の時間がたくさん必要だから、焦らずに充実した日々を過ごしつつ、のんびり考えるというのが理想だ。